

2008年4月18日

淀川水系流域委員会 様

宇治・世界遺産を守る会
藪田秀雄

天ヶ瀬ダム再開発と毎秒1500m³放流の必要性和緊急性について 納得ゆく審議をお願いしたい

I、淀川水系流域委員会において、「淀川水系河川整備計画原案」(070828)について、関係住民の熱心な傍聴や意見提出も受けながら、審議が行われています。それは1997(平成9)年に改正された河川法の主旨を現実の河川整備計画に生かそうとする現代社会の要請にこたえる大きな取り組みと評価でき、成功させなければなりません。

4月22日の委員会においては、この間の委員会審議を踏まえ、河川整備計画原案に対する現時点における委員会の意見をまとめ、原案の再提出をも含む意見書をまとめようとしています。またそれに対する河川管理者の回答を踏まえ、最終的な意見書を作成される段階が近づいています。

II、しかしこの間、天ヶ瀬ダム再開発と毎秒1500m³放流およびそれらに関連する宇治川改修の諸問題についてほとんど審議されていません。これは、第2期委員会においては河川管理者が天ヶ瀬ダム再開発の具体的な計画を提示せず、また関係調査報告も行わなかったということに主たる原因があります。第3期委員会においては原案において天ヶ瀬ダム再開発の具体的計画として巨大なトンネル式放流施設が提示されています。しかし一方で巨大トンネル掘削の安全性に関わる天ヶ瀬ダム地点の地質調査結果や毎秒1500m³放流が影響する諸問題についての調査報告が不十分であり、結果として委員会ではほとんど審議されていない状態です。

III、このままでは原案に対する適正な意見を提出することは不可能であり、同時にそれは宇治川・宇治地域の治水、河川環境(塔の島地区の歴史的景観や宇治川の環境問題)にとっては取り返しのつかない重大な事態を招くものと危惧します。

委員会として、河川管理者提供の情報のみならず必要な情報を入手し、地元住民が納得できる審議をおこなっていただくよう要請します。

IV、天ヶ瀬ダム再開発と1500m³/s放流の必要性和緊急性について審議していただきたい事項について

1、天ヶ瀬ダム再開発・放流能力増大の必要性和緊急性について 計画と目的

①天ヶ瀬ダム再開発の内容は、現在の放流能力 洪水時・毎秒840m³を計画洪水時・毎秒1140m³、琵琶湖後期放流対応時・毎秒1500m³に増大させることで、そのために新たに毎秒600m³の放流能力を持つ入口直径約12m、放流口直径約26mという巨大トンネル式放流施設をダム左岸を掘削して設置

する計画です。

②天ヶ瀬ダムの放流能力毎秒1500m³は琵琶湖の後期放流に対応するためのものです。瀬田川洗堰放流能力の増大は、琵琶湖の水位上昇を低減し、また上昇した琵琶湖水位を低下させる時間を短縮する効果があるとされています。

しかし、目的である琵琶湖沿岸の浸水被害は、琵琶湖総合開発事業によって、大幅に改善されていることは衆知のことです。浸水する戸数は15戸であり、人命に関わるものでなくすでに自衛策が講じられています。また浸水する水田対策として、水稻を36時間以内に冠水から脱出させるために排水機場が設置されています。

琵琶湖後期放流の放流量は多ければ多いほどよいという程度のものであって、毎秒1500m³の数値はもともと宇治川を毎秒1500m³が流れるようにできた時に1500m³流したいということ以外に何ら根拠があるものではありません。したがって毎秒1500m³放流するために下流の宇治川と宇治市民に犠牲を強いることは本末転倒です。

琵琶湖後期放流の放流量は、宇治川の流下能力に合わせるべきで、宇治川洪水を上回ることは地域住民が納得できるものではありません。

また琵琶湖後期放流・毎秒1500m³は、琵琶湖水位がB.S.L.+1.4mの時と説明されています。琵琶湖水位が、B.S.L.+1.4mに上昇するという場合どのような降雨・洪水が想定されているのか明らかにする必要があります。河川管理者は、琵琶湖が戦後最高水位を記録した昭和36年6月洪水が発生した場合、天ヶ瀬ダム再開発・瀬田川宇治川整備によって最高水位はB.S.L.+0.91mが+0.71mに低減されると説明しています。

また過去の琵琶湖の水位は、昭和28年台風13号のB.S.L.+1.00m、昭和36年6月洪水で7月1日のB.S.L.+1.08m、平成7年5月洪水のB.S.L.+0.93mです。

2、巨大トンネル式放流施設の安全性は検証されていません。

天ヶ瀬ダム左岸を掘削して入口直径約12m、放流口直径約26mという日本最大の巨大トンネル式放流施設を設置する計画について、当地にはすでにダム建設時の堤外仮排水路トンネル、関西電力天ヶ瀬発電所の導水路トンネル2本、京都府営水道管トンネルがあり、そこに今回、巨大トンネルを掘削することの危険性についてすでに一般意見でも警鐘が出されています。当然のことながら天ヶ瀬ダム建設時に行った地質調査報告書が存在するのであり、さらに必要な調査を行い、それらを精査して巨大トンネル掘削の安全性について徹底した審議を行う必要があります。

3、天ヶ瀬ダム直下の白虹橋地点における900m³と600m³の十字型合流について安全性は検証されていません。

天ヶ瀬ダム直下の白虹橋地点で、ダムからの放流毎秒900m³とトンネル式放流施設からの放流毎秒600m³が十字型に合流する計画になっています。白虹橋地点は左右の河岸の距離が狭い場所であり、この地点でのこのような合流

がいかなるシミュレーション実験にもとづいて計画されたのか明らかにする必要があります。またこのような放流がいかなる流況を生じさせるのか、検証する必要があります。

4、毎秒1500m³の洪水流が堤防などに与える影響について検証されています。

原案による大戸川ダム建設と天ヶ瀬ダム再開発が行われた場合、宇治川の洪水時の水位は現状の河川整備状況より上昇します。しかし天ヶ瀬ダム毎秒1500m³放流の場合はさらにそれよりも水位が上昇します。塔の島地点ではHWLと同じ水位（ここでは波除のパラペットは1m以下）でしかも16日間（昭和36年6月洪水シミュレーションを参考にした時間）という長期間、洪水が流されることとなります。また下流の槇島地区では水位はHWL以下ですが、槇島堤防はこれまでも指摘されているように宇治川を捻じ曲げて北流させるために築堤された堤防であり、この間宇治川洪水の短期日の例を除いて高水位でしかも16日間もの長期間洪水流にさらされたことはありません。今回計画されているような高水位×長期間の放流は全国の河川でも例がありません。毎秒1500m³放流が堤防に与える影響についていかなるシミュレーション実験が行われたのか明らかにする必要があります。下流の堤防の安全性について徹底した審議が必要です。

5、塔の島地区の河川整備について、河川法の主旨に立脚して、代替案を検討すべきであると考えます。

宇治橋から下流はすでに毎秒1500m³以上の流下能力を持っています。（山科川合流点での計画高水流量は毎秒1420m³、切り上げて毎秒1500m³）最大の焦点は宇治橋上流の塔の島地区です。原案のように天ヶ瀬ダムから山科川合流点まで一律に毎秒1500m³の流下能力を確保する必要はなく、実態に即して宇治川洪水対応と宇治川の河川環境保全が同時に可能な河川整備として、塔の島地区・毎秒1200m³レベルの河川整備を検討すべきであると、検討を要請してきました。これは代替案として検討すべき内容があると考えています。

・・・塔の島地区毎秒1200m³レベル改修の意味・・・

①塔の島地区の河床掘削を行わないことで1300年以上の歴史を有する亀石の歴史的景観を保存することができる。毎秒1500m³改修では宇治川の河床を掘削するために水位は1m低下し、亀石は完全に陸地化する。塔の島・橋島は島の上面と水面の落差が広がりさらに軍艦島のようになります。

河床掘削は、すでに塔の島地区で1.5m程度河床が低下し、砂洲が消滅し、河川環境が悪化している状況からさらなる河床低下を進行させる危険性があります。

②戦後最大洪水・昭和28年台風13号洪水への対応が可能。

河川管理者は、宇治地点の流量＝天ヶ瀬ダム放流量1140m³/s＋宇治発電所＋宇治残留域の流入量。戦後最大洪水（昭和28年台風13号）が発生した時は宇治地点の流量は1500m³/sとなる。したがって、宇治川（宇治地点）において流下能力を1500m³/sの増強する改修が必要となると説明し

ています。宇治地点・山科川合流点ではこの説明は仮に納得できても塔の島地区では納得できません。

天ヶ瀬ダム～山科川合流点の流域面積は27 Km²であり、天ヶ瀬ダム～宇治橋の流域面積は16.8 km²です。また残流域の流出量の説明が当初説明の毎秒300 m³が240 m³に修正されました。

宇治残流域からの流入量が単純に流域面積に比例するものとする、宇治橋＝塔の島地区の流量は $1140 + 60 + 240 \times 16.8 / 27 = 1349$ となります。

さらに、別紙—584は「河川整備状況（現況）において、昭和28年台風13号の洪水が発生した場合、天ヶ瀬ダム下流の流入支川合計は220 m³/s」としています。

この数値を用いた場合は、宇治橋＝塔の島地区は、 $1140 + 60 + 220 \times 16.8 / 27 = 1337$ となります。

さらに塔の島地区の改修規模を毎秒1200 m³レベルに近づけるための方策を検討すると、

- ・天ヶ瀬ダム放流を1140 m³/sから低減するのがポイントです。その場合、どこまで低減できるのか天ヶ瀬ダムの洪水調節容量への影響を検討する必要があります。
- ・現況河道と同様に時差放流的な調整ができないか放流方法の検討も必要です。別紙—584では宇治地点のピーク流量は、天ヶ瀬ダム800＋宇治発電所60＋天ヶ瀬ダム下流支川合計220＝1070 m³/sであって、この場合、天ヶ瀬ダムの放流量はピーク流量840 m³/sの前段階です。時差があるということです。
- ・宇治発電所が、大洪水という非常時に平常時と同じ毎秒60 m³を放流することは納得できないことであって、低減させるあるいは関電吐水路でもって宇治橋下流に流す方法も検討すべきです。

天ヶ瀬ダム1100＋宇治発電所 0＋138＝1238

天ヶ瀬ダム1100＋宇治発電所20＋138＝1258

- ・宇治橋上流流域の流入量も再度検証すべきです。
- ・塔の島地区の流下能力はもともと毎秒1100 m³程度の流下能力があり、ここに天ヶ瀬ダム・毎秒1500 m³放流に先行する工事すなはち亀石地点付近（宇治川の最も流下能力が低い地点）において、塔の川締切堤設置・天ヶ瀬吊橋から塔の川までの導水管敷設・亀石地区の護岸工事・亀石遊歩道設置の3つの工事をおこなったことにより、流下能力が低下しました。今回の計画では、この3つを撤去することと亀石下流の道路のかさ上げによって流下能力は毎秒1120 m³に戻ります。塔の島地区の流下能力はさらに精査すべきです。

③戦後琵琶湖水位が最高になった昭和36年6月洪水時の後期放流・毎秒1200 m³への対応が可能。（別紙—1509）

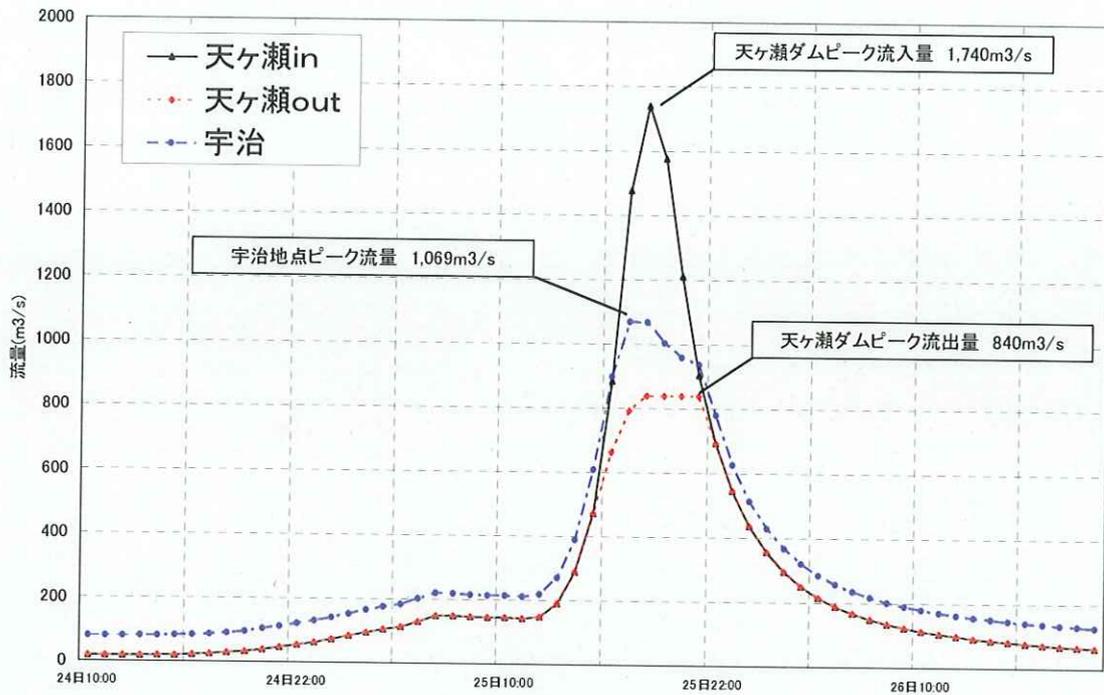
6、毎秒1500 m³放流による下流のその他の河川環境への影響が検討されていません。

以上

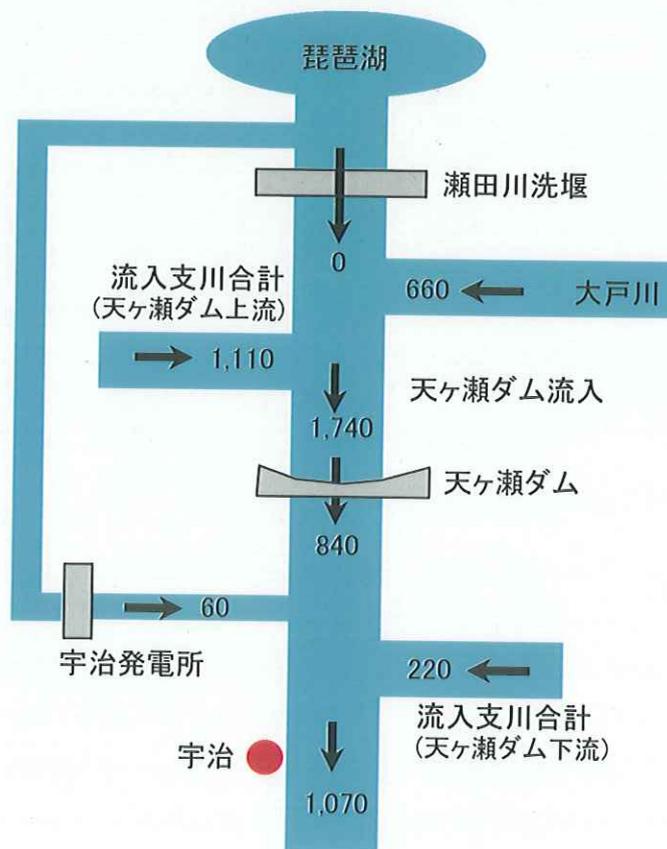
○河川整備状況(現況)において昭和28年13号台風の洪水が発生した場合

◇ハイドログラフ(天ヶ瀬ダム地点、宇治地点)

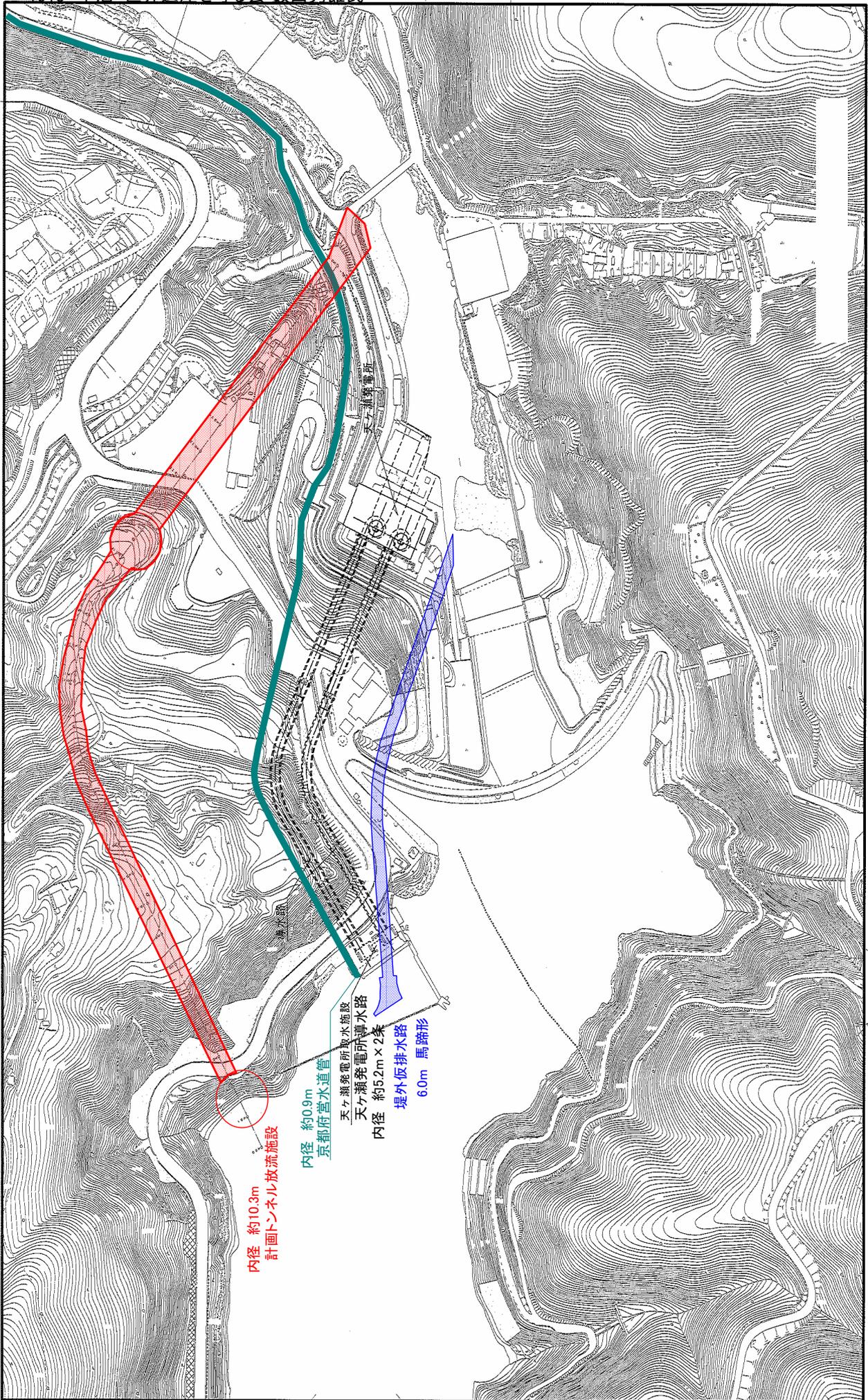
昭和28年13号台風洪水時 ハイドログラフ <河川整備状況(現況)>



◇流量配分図



数値はいずれもm³/s



第70回淀川水系流域委員会 審議資料1 - 1スライド5の図は、第67回淀川水系流域委員会 (H19.11.26) 審議資料1-3-5の11頁に河川管理者がお示したものと同じです。

この資料は、琵琶湖の戦後最高水位を記録した昭和36年6月洪水が発生した場合において、現況の河道状況における琵琶湖水位の時間変化と天ヶ瀬ダム放流能力増強と宇治川・瀬田川の整備後における琵琶湖水位の時間変化を比較したものです。

この場合における瀬田川洗堰地点の流量と天ヶ瀬ダムの流入量、放流量の時間変化は以下の通りです。

